

わが神、主よ、私はあなたに叫んだ。

その時、あなたは私を癒してくださった。

私の魂を陰府から引き上げ、

私に命を与えてくださった。(詩篇30の3~4)

O LORD my God, I called to you for help and you healed me.

You brought me up from the grave , restored me to life from the grave

神の助けを信じて、祈り、叫ぶ。ただそれだけで、闇のなかに沈んでいた私をすくいで上げてくださった。

祈り、叫ぶことがどれほど続いたかわからない。しかし、最終的にこの詩の作者は、救いだされた。

もう滅びると思われたほどの困難から救いだされ、新しい命を与えてくださった。

この経験こそが、この作者の人生の中心にある経験となった。

新約聖書においても、この世を象徴している海(湖)の嵐に苦しめられる弟子たちが、主よ助けてください、私たちは沈みそうだ! と叫んだときに、主は眠りからおきて、波と風をご自分の言葉の力によって静め、弟子たちを助けてくださった、とある。

それはこの詩の作者と同じような経験を記したものである。こうした聖書の記述は、私たちすべてにあてはまる基本的な真理が言われている。

しかし、真剣に祈り、叫んでも、じっさいに病気そのものは癒されないこともある。その場合でも、そうした切実な祈りや心の叫びは、必ず主は聞いてくださっていると信じるのが私たちに与えられた道である。そのような打ち続く困難にあつて、もし神を信じなくなるなら何に拠り所を求めることができるだろうか。

主イエスも、十字架にかけられる前夜、必死に祈った。それはイエスのような方でも、現実の闇の力、自分を襲おうとしている苦しみを前にして苦しみもだえた。そのようなとき、「私の願いでなく、ご意志のままになさってください」と祈り、その大いなる苦しみをすべて神にゆだねられた。そして神はイエスをその苦しみを通って、神のもとに引き上げられた。

そのように、ある期間でなく、全体としてみると、真実な祈りは必ず聞いていただける。そしてその暗闇に光を与え、そこから引き出してくださると信じることができる。



大雪山とは、北海道中央部にそびえる多くの火山の総称で、この花を撮影した赤岳というのもその一つ。旭川の教友を尋ねた帰途、立ち寄った山で、頂上まで登る時間はなかったのですが、途中に折々に北国の高い山に咲く花々が迎えてくれました。シャクナゲの仲間は、徳島県の標高700メートル程度の山にも時折見かけますが、花の時期に遭遇することは少ししかなかった花です。しかし、秋田駒ヶ岳や福島の吾妻連峰、そしてこの大雪山などには、その美しい花がよくみられます。ここにあげたのも、白山で最初に多く見いだされたためにその名前に「白山」がついています。このハクサンシャクナゲは、この写真のものは純白ですが、やや赤みを帯びたものもあります。花びらの内側に緑色の斑点が飾りのように見られます。背後の山の残雪がこの付近の気温の低さを示しています。

この花は、本州中部以北、北海道などの高山に分布しているもので、寒さ厳しい環境に生育するものです。

創造主は、積雪と厳しい寒さ、風雪にも耐えて美しい花を咲かせるような力を、はじめから与えているのを感じます。私たち人間はそうした樹木よりはるかに高いレベルの被造物として創造されているゆえに、私たちもさまざまの困難に耐えていく力を与えられていることが推察できます。

草木はそこに生育するときすでにその力を持ったものとして存在していますが、人間は、自然のままではそのような力を持っておらず、神を知って、神に求めることにより、そのような力が与えられるのだと言えます。主イエスが、「求めよ、そうすれば与えられる」と言われたとおりです。(写真・文ともに T. YOSHIMURA)